

展覧会は地域への発信の場

「学校の展覧会は作品を展示するだけでなく、学 校での子どもの学びを地域へ発信する大切な場 です。だから、展覧会が開催されている間は、 ずっと会場にいて、ひたすら保護者や地域の方と 話をします。お子さんの作品を見て『ちゃんと色 をぬれてない』と言われることもありますが、『お 子さんは、こんな考えでこう色を置こうと決めたの です』『ここの美しさを見てください』と伝えます。 あとは、会場の見せ方も大切にしています。作品 は子ども自身ですから、その子が『ここに居場所 を見付けた』と思える配置になるまで何度も置き

写真 校内展の様子

東京都目黒区立五本木小学校の展覧会が2019年 2月14~ 16日に開催された。入り口から奥に向



『〈想像〉のレッスン』 鷲田清一(著) NTT出版刊

「ひと、もの、こと、言葉をもたないものにも想像 をたなびかせるということが今とても大事だと教え てくれる。それが図工にも重なります。」

A STATE

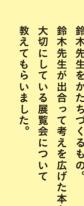
『センス・オブ・ワンダー』

レイチェル・カーソン(著)、上遠恵子(訳)

「若い先生たちにも、自分自身のセンス・オブ・ワン ダーって何かなっていうことを大事にしながら、子 どもが発揮する力を一番に考えて、授業づくりをワ クワク楽しんでほしいです。」

『長田弘詩集』 長田弘(著) 角川春樹事務所刊

「うまくいかないときは少し休んで、深呼吸する時 間をもつことも大切。空をぼんやり見上げたり、好 きな音楽を聴いたり、仕事以外の夢中になれる時 間を過ごすなど、気を取り直して新しい一日を更新 したいです。」



义

35

危

义

I

の

先

生

の

そ

の

ま

わ

学習指導要領

「対話的な学び」ってなんだ?



自己の考えを広げ深める

今号のキーワードは「対話的な学び」。図工の時間は、様々な形で他者の考えに触れられる 時間です。子どもたちは、「感じたことを伝え合う」「友だちの活動をのぞき見る」「作品を 鑑賞する」「アーティストの話を聞く」など、多様な考えに出合いながら、発想を広げていま す。そのような学びを促すためには、自分の感じたことを大切にできる空間、他者の感じた ことを認められる空間が必要なのではないでしょうか。

多様な考えを認め合える空間、それが「対話的な学び」の実現につながるのです。

学習指導要領 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

主体的な学び

対話的な学び

深い学び

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広 **げ深める**「対話的な学び」が実現できているかという視点。

※造形的な見方・考え方 感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをも

表紙 『あたためよう! た・ま・ご』(4年生)

イメージのたまごを想像し、紙粘土の形や色を変えて立体に表す題 材。海が生まれる、友情が生まれる、かわいいが生まれる……。友だ ちの作品もいいねと思える空間、自然と思い付いたことを伝えられる 空間が、想像をさらに広げていく。

クリエイティブディレクター:池田晶紀(ゆかい) アートディレクター:畑ユリエ 表紙写真:池ノ谷侑花(ゆかい) フォトグラファー:池田晶紀、川瀬一絵(ゆかい) イラストレーション:やまねりょうこ(ゆかい)

図工のみかた 10号

日文教育資料[図画工作] 平成31年(2019年)3月31日発行

編集·発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5 TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33448

http://www.nichibun-g.co.jp/

大 阪 本 社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5 TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東 京 本 社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16 TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14

TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F•B TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1 TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690





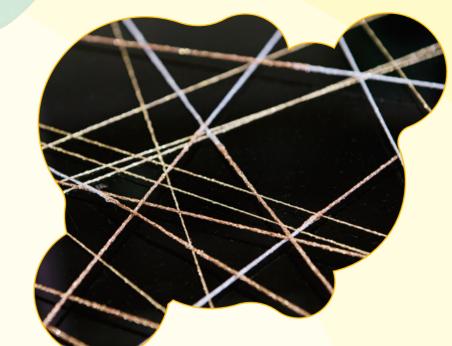
今号のキーワードは、 「主体的・対話的で深い学び」 の中の、「対話的な学び」。

子どもの姿と 図工の見方について、 図工の味方、

鈴木陽子先生に聞きました。

語り手

(東京都目黒区立五本木小学校指導教諭)





原点は「感じる」ことへ

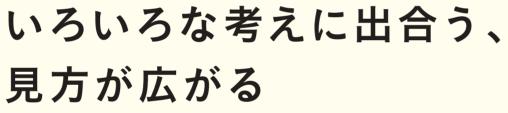
対話の根っこにある 「自分の感覚」

今号のテーマは対話的な学びですが、まず「感じる」ということがないと、対話したいことも、 表したいことも生まれませんよね。図工は、「思ってもみなかった自分の感覚と出合う」、それ が原点だと思っています。自分の身体を通して「これっていいな」って分かるのが最初です。

本校で初めて担当した1年生の図工の時間に、「色とあそぶ」という授業をしました。 み んな夢中になって小さな紙に絵の具をのせてはかきたいこ<mark>とをか</mark>いていきました。1人<mark>だけ</mark> 「嫌だ」って1時間くらい図工室の隅でうずくまっている子がいて。嫌なものはかかせられな いから、様子を見守ることにしました。ずっと友だちがしていることを見ていたのでしょう。 友だちがトロトロの絵の具の心地よさに浸り始めたとき、その子が「そんなにいいのか」とい う感じでそっと絵の具置き場に来て、黒い絵の具で何かかきだしました。よく見ると "BEATLES"って。でも、気に入らなかったらしく、流し場に持って行ってザーっと洗い流し たんです。それをタオルで拭いて白い絵の具をぬり、また黒い絵の具でBEATLESとかく。 そして洗い流す。納得するまでそれを繰り返していました。

絵の具に触れながら、自分の感覚や行為を通して、「これがしたいんだ」ということを見 付けたんだと思います。その子は、最後はBEATLESのメンバーの顔をかいて、くちびるを 赤くぬったんです。だんだん他の色を使い、次から次へとか<mark>いていくので、周りの子どもた</mark> ちも「すごーい」ってその子のところにやってくるんですよね。自分の身体を通して「こんなこ とをいいと感じるんだ、自分はこんなことができるんだ」って、思ってもみなかった感覚と出 合う。そこから自分が外に開かれていく。そういう図工の原点を<mark>改めてその子に教えられま</mark> した。それはきっと「思ってもみなかった」考えをもつ他者や、まだ見たことのない世界に開 かれることにもつながっていくんだと思います。

(関連)「図画工作科では、『この形や色でよいか』『自分の表したいことは表せて



子どもって、作品に驚くようなタイトルを付けることがありますよね。私たちの想像をはる かに超えて、子どもたちは活動の過程でイメージを膨らませているからだと思うんです。

先日、土を絵の具にして絵に表す「大地のおくりもの」という授業を行いました。土は子ど もたちと集めることにしたのですが、身の回りにはコンクリートや人工芝が多く、なかなか採 取できないという壁にぶつかってしまって。それでも、地域の公園にお願いしたり、保護者 の方や担任の先生が知り合いに声をかけたり、子どもも近所の工事現場でたくさんの土を見 付けると「少しもらっていいですか」と自分からお願いしたりして、いろいろな人の協力で何 とか集めることができました。集めた土を天日干ししてふるいにかけてからビンに入れ、図 工室の机に並べてみると100色近くにもなって、子どもたちも「土の色ってこんなに違う」と 感動していました。ビンには「近所のおじさんの庭の土」「担任の先生の生まれたところの美 しい海の砂」のようにラベルを貼っているので、それを見ながらとても大切に使うんです。ど こでどうやって集めた土なのか、友だち同士で話しながら、子どもたちの土への意識が変 わっていったんだと思います。

栄養教諭の紹介で、山形県の枝豆農家の方にも土をいただき、インターネット電話でお話 を伺いました。畑の土はどうやってつくるのかという子どもの質問に、「雑草や虫とともに、 生きている土が自分でつくる」と農家の方が答えてくださって、そこでまた子どもの土に対す る認識が変わりました。手が汚れるから触るのが嫌な土ではなく、愛おしいものになって いったんです。作品のタイトルに「いただく」や「命」と付ける子も多くて、土に対して「ありが とう」と言葉を添えている子どももいました。

土を通して、自分にはない他者の思いや経験に触れて考えが広がっていく、対話的な学び でした。出合ったものが、形や色として新たな意味をもって子どもの表現の中に再生されて いくんです。

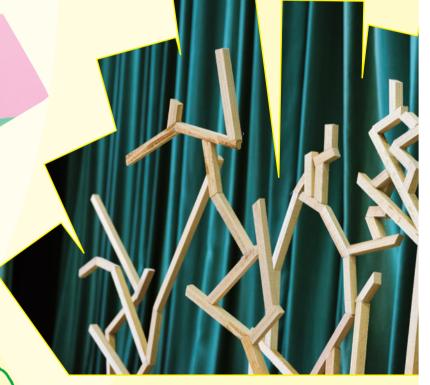
> (関連)「『対話的な学び』の視点とは、他者の考えに 触れることで、自己の考えを広げたり深めたりする 視点である。児童生徒一人一人が自ら考えること はもちろん重要であるが、他者の考えに触れること は、新たな気付きや発見をもたらし、自らの思考の 長所や短所を明らかにするなど、多くのメリットが 期待される。」(初等教育資料 No.960 p.4より引用)

図工室は一人ひとり 違うことができる空間

自分がいいと思い付いたことを、試したり、つくりかえたりして、実現できるのが、図工 室での学びだと思います。だから図工室は、一人ひとりが活動に没頭できる空間、そして それぞれの「いい、面白い」が響き合っている空間にしたいと考えています。話し合わなく ても、友だちのしていることに触れることでも、考え方は広がりますよね。例えば授業の最 初に、前時につくりつつあるものを並べて置き、みんなで一緒に見てから始めることがあり ます。「違うよさがある」「こんなこともできる」ということに気付いてほしくて。

また、5年生の「光のステージ」という授業では、針金でつくった骨組みに接着剤を糸の ように垂らして、光を当ててきれいに見える立体をつくるのですが、例年、ステージは私が 用意した四角い箱を使っていました。でも今年は全部子どもに委ねてみることにしました。 一人ひとりの考えで展開できるといいなと思っていましたが、やってみたら子どもの活動が すごく広がりました。きっと、材料の可能性を子どもが探り、自分のやりたいことを追求で きたのでしょう。でき上がった後、図工室を真っ暗にして作品に灯りをともすと、子どもた ちが口々に「どの子もすごい」「みんなキレイ」って歓声<mark>があがったことが本当に嬉しかった</mark> です。お互いのよさを認め合えたのは、自分の「いいな」を実現できたからでしょうね。 自分の「いいな」は友だちとは違う。だけど「それもありか」と思えるような空気ができてい たのだと思います。

みんな違うというのは教師だってそうです。自分のもっているよさを大事にしながら、自 が目的となりがちである点に留意する必要がある。子供の資質・能力の育成のた 信をもって、楽しんで授業をすることが大切だと思います。







(関連)「対話的な学びの視点については、(中略)『話し合えた』『交流できた』のみ めに行うことを忘れないように、指導の目標を常に意識することが重要である。」 (初等教育資料 No.961 p.5より引用)





